

特別企画

# 大学生の学習・選好の実態と 高大接続の課題

—第2回大学生の学習・生活実態調査より—

ベネッセ教育総合研究所 高等教育研究室 主任研究員 樋口 健

ベネッセ教育総合研究所では、2012年11月に、4年ぶりとなる「第2回大学生の学習・生活実態調査」を実施した。この結果を基に、大学生の学習実態と、どのような大学教育や授業を望んでいるのかを紹介する。また、高校と大学の教育接続の今日的な課題について考察する。

## 学習状況

### 4年前と比べ 学習時間は増加の兆し

まず大学生の学習状況について、時間面から確認しておこう。結論から言うと、2008年に行った第1回の実態調査時と比べて、学習時間は増加傾向にある。1週間あたりの授業外の学習時間について経年比較した結果をみると(図表1)、「授業の予復習や課題をやる時間」は、平均時間が2008年の2.2時間から2012年は2.8時間へと増加している。同様に「大学の授業以外の自主的な勉強」も、平均が1.9時間から2.4時間へと増加している。

学習時間の分布を見ると、「学習に取り組む層」と「取り組まない層」の分化が生じつつあるのも特徴だ。例えば、「0時間」、つまり1週間に授業以外には何も学習していない層の割合に顕著な経年変化は見られない。「授業の予復習や課題をやる時間」は2008年が20.2%、2012年が18.7%、「大学の授業以外の自主的な勉強」はそれぞれ31.7%、31.0%であった。

一方、1週間あたり「3~5時間」以上学習している層を合算すると、「授業の予復習や課題をやる時間」は、この4年間で26.6%から33.4%に6.8ポイント増えており、「大学の授業以外の自主的な勉強」も、19.2%から23.4%に4.2ポイント増えている。

### アクティブラーニング型 授業経験率が増加

大学生の学習時間増加の背景にあるのは何か。まず考えられるのは授業の変化である。学習しない大学生の問題が指摘されて久しく、その改善に向けたさまざまな授業改革が進んでいるであろう。本調査で確認できる変化は、いわゆる「アクティブラーニング型の授業」の増加である。

図表2は、大学でどのようなタイプの授業を経験しているかを示したものである(経験率は「よくあった」「ある程度あった」の合計値)。2008年の経験率との差をグラフの右に示した。

経験率の変化に着目すると、とりわ

けアクティブラーニング型の授業が増加しているのがわかる。経験率が最も増加したのは「ディスカッションの機会を取り入れた授業」で、2008年の46.7%から2012年は54.2%に、7.5ポイント増加している。これに次いで増えているのが「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」で、32.4%から39.1%に6.7ポイント増加した。以下、「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」(6.6ポイント増)、「大学での学習方法を学ぶ授業」(6.2ポイント増)、「上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーションがとれる授業」(ともに6.2ポイント増)、「グループワークなどの協同作業をする授業」(5.8ポイント増)の順で続く。これらはいずれも「アクティブラーニング型授業」であり、その広がりが推測できる。

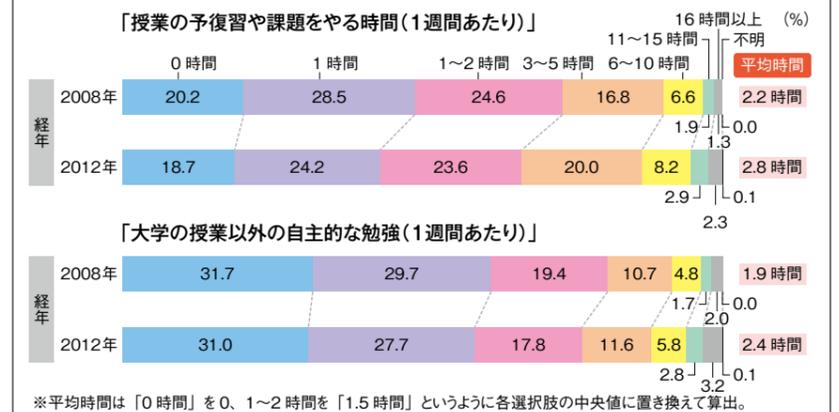
次に経験率増加の上位3項目である「ディスカッションの機会を取り入れた授業」「教室外で体験的な活動や実習を行う授業」「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」の経験の有無と、「授業の予復習や課題」など授業に関わる学習時間との関連について見る(図表3)。「週3時間以上学習している割合」に焦点を当てると、いずれの授業についても、「経験あり層」と「経験なし層」の差は明瞭である。アクティブラーニング型の授業は、グループでの実習やプレゼンなどの実施に向けて、授業外の準備が必要であることが多い。このことが学習時間の増加を後押ししているのかもしれない。

## 学習に対する選好

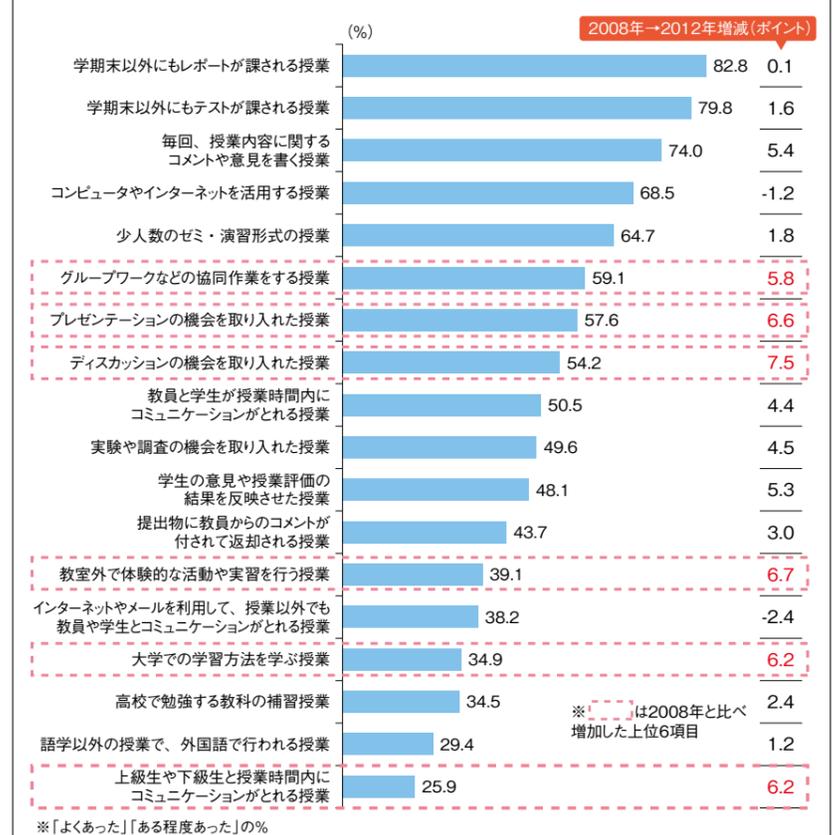
### 「受け身姿勢」は 4年前よりも顕著に

このように、学習時間面からは、現在課題となっている「大学生の主体的な学び」は促されているように見え

図表1 学習時間



図表2 大学での授業経験



図表3 アクティブラーニング型授業の経験別 週あたり3時間以上学習している割合

授業の種類	授業の予復習・課題について週あたり3時間以上学習している割合	
	授業経験あり	授業経験なし
ディスカッションを取り入れた授業	37.7%	28.3%
教室外での体験や実習を行う授業	37.2%	30.8%
プレゼンテーションを取り入れた授業	37.5%	27.7%

※授業経験ありは「よくあった」「ある程度あった」の%。授業経験なしは「あまりなかった」「ほとんどなかった」の%。

る。しかし、学生がどのような大学教育や授業を好むのか、「大学教育に対する選好」のこの4年間の変化を見ると、逆の様相が浮かび上がる。結論から述べると、学生に見えるのは主体性ではなく、むしろ受け身的、依存的な姿勢の強まりである(図表4)。

まず、「単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業(2012年45.2%)」よりも「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業(同54.8%)」が好まれており、それは4年間で5.9ポイント増加している。授業の形式に対する選好面で見ると、「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業(2012年16.7%)」よりも「教員が知識・技術を教える講義形式の授業(同83.3%)」を好む割合が圧倒的に高く、4年間の変化はほとんどない。アクティブラーニング型授業の増加はすでに述べたが、全体として学生が想起する「あるべき大学の授業」は、普遍的に、知識伝授型の伝統的スタイルのままである。

また学習方法面では、2012年をみると「大学の授業で指導を受けるのがよい」が43.9%、「学生が自分で工夫するのがよい」が56.1%と、後者の割合が高い。しかし、この4年間の変化

をみると前者が4.6ポイント増加しており、自分の工夫よりも指導を受けたいとする志向が高まっている。

### アクティブラーニングの効果的な活用に期待

大学生の主体性をどう育むかが社会的課題として叫ばれる今日、データを全体的に眺めると、状況は確かに厳しいと言える。しかしその打開は、アクティブラーニングの導入・発展にかかっているのではあるまいか。アクティブラーニング型授業が学生の授業外の学習を促す可能性があることはすでに示した。加えて、われわれが実施した別の分析では、アクティブラーニング型授業の経験を積むほど、「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業」よりも「単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業」を選択する比率が高まる傾向が確認されている。

この事実が意味するところは何か。積極的な学生がアクティブラーニング型の授業を好む可能性もあろう。しかし、専門分野や社会的課題に関わる活発な討議・共同作業の中で、多様な学生が相互に刺激し合い、学びへの新たな

関心や積極的な態度を育む可能性も大いに考えられる。実際にアクティブラーニング型の授業を経験した学生からは、「活発な議論の中で他の学生の考えを知り、自分の世界や考えの幅が広がった」「授業を充実させるためにも、さまざまな勉強をする必要性に気付いた」等の声が寄せられている。

アクティブラーニングの導入は大学の教育の課題として緒についたところである。個々の授業におけるアクティブラーニングの指導力を高め、効果的なカリキュラムをどのように編成するか、今後の展開が注目される。

### 高大の教育接続の課題

#### 入試方式・学部で異なる高校までの知識不足感

次に、いくつかの調査結果から、高大の教育接続の課題を検討する。

本調査では、大学で学ぶうえで、高校までの知識・理解が不足していると感じる科目について聞いた。

英語ではセンター利用入試や一般入試など、学力試験を課す入試(以下学力入試)を経て入学したかどうかにより、知識・理解の不足感に15ポイント近くの差がある。すなわち推薦・AO入試など学力試験を課さない入試(以下非学力入試)によって入学した学生のほうが知識・理解の不足感が強い。これは多くの学部系統に共通したもので、社会科学系統、教員養成系統において特に顕著である。

数学については、理工・農水産・医薬保健系統において、非学力入試で入学した学生のほうが知識不足をあげる割合が高く、いずれも10ポイント以上の差を示している。

理工学系統では、数学と物理において、非学力入試を経て入学した学生に知識・理解不足を感じる割合が高く、

学力入試で入学した学生をそれぞれ15ポイント前後上回っている。

農水産系統でも数学、化学、生物で、非学力入試の層のほうが、知識・理解不足と回答する割合が高かった。

このように、入試方式、学部系統によって、高校までの履修科目に関する知識・理解の不足感は異なる。個々の大学は入試方式や学部系統による学力の違いを考慮して、学生の状況に合致したきめ細かな導入教育やリメディアル教育を実施する必要がある。

#### 学習習慣に結び付かない高校での受験勉強

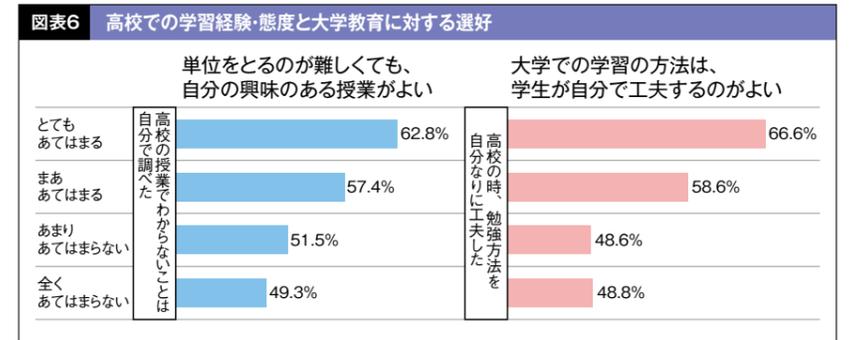
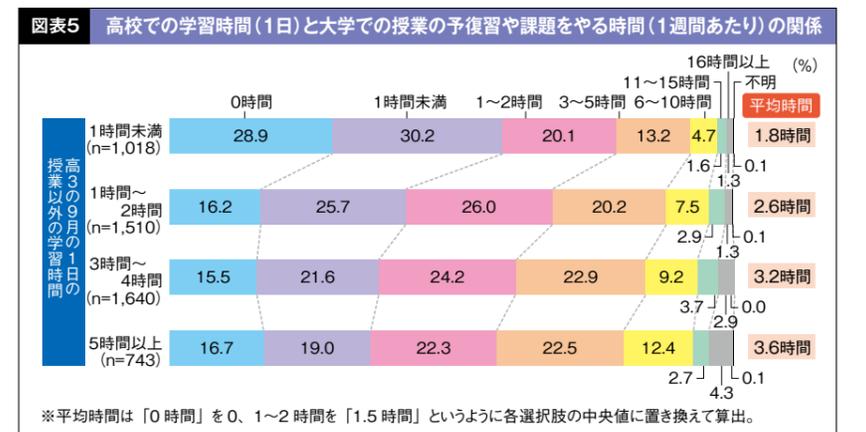
次に高校までの学習と大学での学習の関係について見てみよう。図表5は、受験勉強が佳境に入る高校3年生の9月時点での「1日の授業以外の学習時間」と、現在の学生生活において「授業の予復習や課題をやる1週間あたりの時間」の関係を見たものだ。

これによると、受験期に1日あたり1~2時間学習していた層の大学入学後の1週間あたりの学習時間は、「0時間」と「1時間未満」を合わせて41.9%に上り、決して十分とは言えない。受験期に1日5時間以上とかなりハードに学習していた層でも、35.7%が0時間を含む「1時間未満」である。

すなわち、高校時代に受験勉強に相当の時間をかけていたとしても、それが大学でも継続する「持続的な学習習慣」とはなっていないことがわかる。

#### 探究的な学習態度が積極的な学習選好に影響

一方、高校時代に培った学習習慣・態度は、先にみた大学教育に対する選好に結び付いている可能性がある。代表例を挙げると、高校時代に「授業でわからないことは、自分で調べた」と

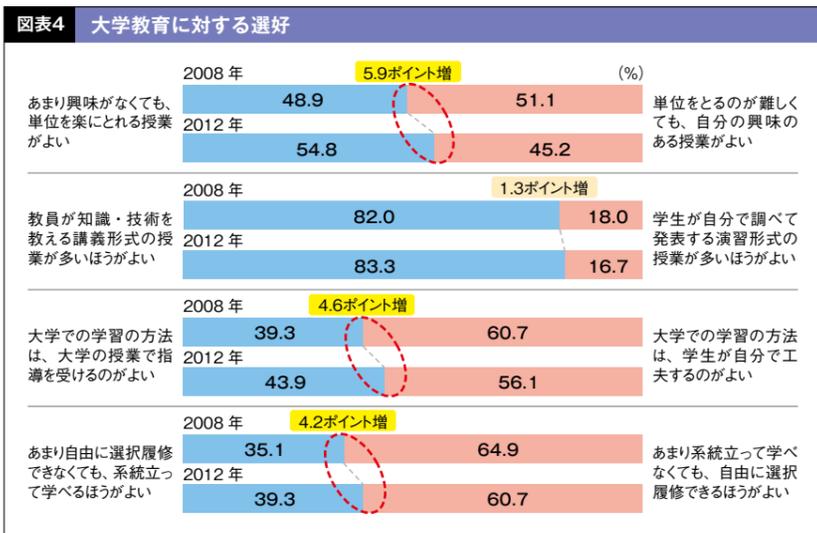


ような探究的な学習態度を備えていたかどうかで、「単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい」と考える積極性に明瞭な差異が表れる。同様に、高校時代に「勉強方法を自分なりに工夫した」場合、「大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい」とする、能動的な学習方法獲得の態度につながる割合が高い(図表6)。

以上、高大の教育的接続の課題について、入試方式、学習科目、学習時間、学習態度・経験の観点から見てきた。今日、カレッジレディネス、学力保証の観点から、入試改革の問題が議

論されることが多い。こうした学力面のつながりに加え、高校時代に培った学びへの探究的、能動的な態度が、大学入学後の学習に関連していることをふまえると、高校での日常的な学びや進路選択、受験を通じて、学習そのもののおもしろさを実感させ、意欲を高めることも、高校と大学が連携して取り組むべき重要な課題である。

周知のように、主体的な学びを促す大学教育は喫緊の課題である。また、それぞれの大学でミッションを定義し、めざす人材像へと学生を導く教育が求められる今日、これを実現する取り組みとして提起しておきたい。



調査概要	
<b>「第2回大学生の学習・生活実態調査」</b> ■ 調査主体: ベネッセ教育総合研究所 ■ 調査方法: インターネット調査 ■ 調査時期: 2012年11月 ■ 調査対象: 大学1~4年生 ■ 有効回答数: 4911人	<b>「第1回大学生の学習・生活実態調査」</b> ■ 調査主体: ベネッセ教育総合研究所 ■ 調査方法: インターネット調査 ■ 調査時期: 2008年10月 ■ 調査対象: 大学1~4年生 ■ 有効回答数: 4070人